

キズナリア

――冬。

私達の街では、あまり雪は降らない。
けれど海が近いからか、冷たい風が遠くからよく吹いてくる。
今日も私は自分の身体を暖めようと小走りで家を出る。
駅までに身も心も暖かくなっているように。とことこと。

私の名前は四ツ谷みなみ。

ひらがなでま行で女子力高そうな名前だが、身長169cmというステータスが足を引っ張っている。そんな女子だ。

ちなみに女子高校生……略して女子高生の身分でもある。

現在2年生。来年からはいよいよ受験生。少し憂鬱だ。

部活は水泳部。シーズンオフなので近くのスポーツジムに行ってお金を落とさないと泳げない。なのでこの時期はエネルギーを持って余し気味なのが正直な所だ。

泳ぐことは好きだが、ハングリー精神はそんなでもない。身体を動かすのは好きだが勝つのが好きというわけではない。大会とかは「出るから勝とう」程度だ。不真面目とは思っていない。多分水泳が私にとっての一番じゃないとわかっているからこんな感じなのだ。

じゃあ一番ってなんだ。

それを知っていたら、当然水泳を続けてなんていない。

……頭の中の無駄が多い。元気な証拠だ。

しかし体は震えてしまうものである。今日は本当に寒い……。

駅が見えてきたところでイヤフォンから流れる音楽が変わった。テクノポップの鼓動が全身に伝っていく。

が、イントロの途中で無遠慮に再生を切る。

マフラーをぶかぶかに巻いて、オリーブ色のダッフルコートに身を包み、真っ白でふかふかな耳当てをしている待ち人が今日も寒そうにしているのを見つけた。

待ち人の名前は東野和葉（かずは）。

小さくて、私と歩くとよりちんまく見える身長147cm。私と同じ学年、クラス、中学だ。

部活はバレエ部。マネージャーをしている。とても真面目で、とても可愛いので、まあなんと
言うかアイドルだ。

きっと和葉は私と違うニュアンスでバレエが好きだと思う。

それはともかくとして。

「さむいね」

赤くなった鼻のままにっこりと笑う。

「みなみちゃん、また走った？」

「うん」

「そっか、ぬくぬくか」

「いややっぱ寒い」

「そっか、よかったー」

「どこも良くないよ」

「がはは」

がはは、という笑い方は和葉の口癖だ。大好きだったおじいちゃんの笑い方を似せているらしい。

「ねえねえ。今朝何食べたと思う？」

ホームに並んで電車を待っていると、和葉が期待を目に宿しながら問うてきた。

「アジの開き」

「おお、正解」

正解してもらいたかったくせに、こうやって驚くのはいつものことだ。

「毎回答えそれじゃん」

「がはは」

「好きだねえ」

「アジは美味しいよ。焼き魚一番だよ」

「私はホッケの方が……………さて、なみに私は今朝何食べてきたでしょうか」

「えっ」

和葉が黙る。考え始める。やがてはっとして。

「……ホッケ！」

「残念、正解は昨日のすき焼きの残り」

「ええーっ！ 何それ美味しそう」

「残飯感は拭いきれなかったけどね」

びゅうと冷たい風が吹く。

ホームの電光掲示板に間もなく電車が来ることが表示される。

かんかんと近くの踏切がなる。

音が乾いている。

和葉がまたぶるりと震える。

「今日遅いから混みそう」

「だね」

ホームに侵入してきた車両は案の定人で溢れそうだった。

事前に一番空いている車両が止まるであろう位置を選んでも、私達とあと1人入れば限界に達するレベルである。

お互いに朝練がないとこうなってしまうのは、ちょっと考えものだ。

私は和葉より先にさっさと車両に入って彼女がスムーズに入れる分のスペースを空けることにした。

ちょっと押し込み気味に入ったので、和葉が入り終わりドアが閉まると人の圧が元に戻って私

達が押し返される形になる。

私に背を向ける形で入っていた和葉は、押された私とドアに少しだけ挟まれてしまった。

「うぎゅ」

強めの圧迫が和葉の口から苦悶の声を出させる。

「ごめん、大丈夫？」

身長差があるせいで和葉を背中から抱えるような形に落ち着く。

「だいじょぶ」

「ちょっと我慢して」

「大丈夫だってば」

和葉が私にやや体重をかけてくる。

「みなみちゃん、あったかい」

「そうかな」

和葉の匂いが鼻腔をくすぐる。

「.....そんなに寒かった？」

「寒かった。最近冷え込みすごいよね」

「んー」

「みなみちゃん、そんな寒くないの？」

「寒いけど、まあ別に.....」

ちょっとだけ見栄。

「水泳部すごいなあ」

「いや水泳部関係ないでしょ」

「えっ、あのシャワーを毎回浴びてるからてっきり」

「あれは私等だって冷たいときは冷たいよ」

「.....マジで？」

「マジ」

嘘はついていない。

「なんだ一、水泳部のみなさんはてっきり暖かいのかと.....」

「寒いに強いではなく暖かいと来たか」

「でもみなみちゃんは暖かい」

「あいあい」

——電車が揺れる。

窓の外は曇り。街並みは灰色。

揺れるたびに後ろから圧がかかる。けれど、負けたら和葉を押しつぶしてしまうので、少し必死だった。

少し汗をかいているかもしれない。

.....ふと、人ごみについて思う。

この電車で痴漢が出たという話は聞いたことがないが、無いとも確定できない。そんなことを思いつく。

和葉は可愛すぎるくらい可愛いので警戒するに越したことは無いだろう。私が後ろからこうしてカバーできるのはちょうど良かった。痴漢も私の筋肉質な尻を撫でてもつまらんだろう。

なんてことを、満員電車に乗っては毎回思っている気がする。

「雪、降っちゃいそうだね」

ドアの向こうの景色を見ながら和葉が言う。

「ん。嬉しそうじゃん」

「雪は別腹！」

「食い気かい」

「がはは。雪降ったら遊びに行こうよ」

「寒いでしょ」

「雪は別だってば！」

「ほんとかよ……………で、どこに？」

「公園とか、空き地とか？」

「雪合戦するの？」

「雪だるまでもいいよ」

「今時小学生でもしないんじゃないかな」

「弟がしてたからそこは大丈夫！」

「さいですか……」

「なんなら学校でもいいよ」

「場所の問題じゃないっしょ」

「そうだね」と笑う和葉。

どうしてだろうか。

最近、和葉といるときに余計なことを考えてしまう。

「……………ねえ」

「ん？」

話しかけて、そのまま黙ってしまう。

「……みなみちゃん？」

「ごめん。なんでもない」

「そう？」

「うん」

——私達はいつまでこのままでいられるんだろう。

と。

本当は言いかけていた。

これは、初めてじゃない。

今までも、何回も言おうとしていた。聞く理由もわからないままに。

口が勝手に動いて、音がひとりで飛び出していきそうな感覚があった。

……冬が来て、間もなく春。

私達の最後の時間が始まる。

「早く暖かくならないかな」

その和葉の言葉に心臓が跳ねた。

思わず変な声が出そうになる。

和葉、それって————

「最近たけのこ食べてないから食べたくてさー」

吹き出してしまった。

「えっ、みなみちゃん？」

「……どんだけ食い気溢れてるのさ」

「あれ？ みなみちゃんの家はすき焼きにたけのこ入れないんだっけ」

「そこから繋がってたんかい！」

センチメンタル気取ってたのがアホらしくなった。

なに。いつものことだ。

こうしてまた私は忘れる。ただそれだけのことなんだ。

そう、いつものやりとり。それが愛しい。

「うひゃっ！ 電車出るとさむっ」

「そんなに？」

「だってさっきはみなみちゃんが暖かったんだもん」

ホームに降りて、改札を二人で抜ける。

ここから学校までは、もう目と鼻の先だ。

同じ制服を着た女の子がわらわらと歩いている。

みんな寒そうだ。

「寒いっ」

密着してくる和葉。

私も。少し、暖かい。

和葉がいるから。

「しゃーない。教室までおしくらまんじゅうでもする？」

「おっ、ノッタ！」

――冬は寒いが。

寒いなりに、いいことはあるのだ。